

すてきな大分を見つけ、伝えよう！

2026.8.3

『都甲谷^{とごうだに}戦国武将 吉弘氏について』4月講話会ご報告

皆さんこんにちは。早いものでもう夏本番に入りました。お変わりございませんか。去る4月の講話会は、豊後高田市文化財室の松本卓也先生をお迎え致しまして、戦国時代の太友氏重臣として多大な功績を残した「都甲谷戦国武将吉弘氏について」お話を伺いました。

今回は、その要旨をご報告させていただきます。

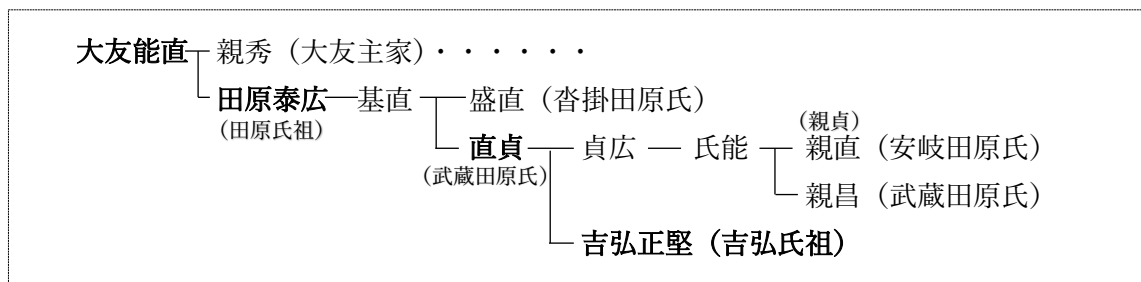
1. 戦国時代の国東半島

(1) 豊前と豊後の国境に面した豊後高田地域

先ず、都甲谷を含む豊後高田地域は、戦国時代は豊後北部の守りの要衝でした。豊後高田市内には、旧豊前と旧豊後の国境の跡が残り、大内氏や毛利氏との対立時には緊迫した地域でありました。鎌倉時代から室町、戦国時代にかけて豊後領主であった太友氏としては、北の守りを固めるため、実力を備えた優れた武将の配置が必要でした。当初田原氏がこの任の中樞にあったのですが、これが難しくなり、代わりにその役割を担ったのが吉弘氏であったのです。

田原氏は、太友初代能直（よしなお）の子泰広（やすひろ）を祖とし、吉弘氏は、その田原三代直貞（なおさだ）（武蔵田原氏）の子正堅（まさかた）を祖としています。

【系図】



(2) 吉弘氏の起こり

吉弘氏初代の正堅（まさかた）は、南北朝時代（14世紀半ばから150年程）に肥後の菊池氏との戦いなどで田原本家の右腕として活躍しました。この功績の恩賞として、武蔵郷吉弘（現国東市武蔵町吉弘）の地が与えられ、その地名に因み「吉弘」を名乗りました。その後、吉弘氏は合戦等により次第に領地を広げ15世紀の中頃までには都甲地区に進出しました。新領地では現地勢力との融和を大事に考え内政にも力を注ぎ、徐々に勢力を拡大していきました。

(3) 田原氏・太友氏の家督相続混迷期に反抗の動き

一方、田原氏はどうだったのでしょうか。15世紀末から16世紀初頭の田原親宗（ちかむね）（9代）・田原親述（ちかおふ）（10代）の時代のことですが、太友氏は家督相続で大混迷期にありました。田原親述は、太友政親（まさちか）（16代）と義右（よしすけ）（17代）父子の争いに関与したのです。また親述は、太友親綱（ちかつな）（13代）の子である宗心（そうしん）を擁立しようと周防の大内氏を後ろ盾にして動いた他、朽網親満（くたみちみつ）が太友家家老職を外されたことを不服とした反乱（朽網親満の乱）へ加担するなど、ことごとく太友本家へ反抗したのです。

本来、田原氏は、大友氏に極めて近い立場にあり、大友氏を徹底して支えていくべきところですが、逆に敵対側の大内氏や反乱側の朽網氏に加担したのです。とうとう大友氏 19 代義長には、「田原氏に警戒するように」と次代義鑑（20 代）へ申し送られるという始末でした。（「義長条々」1515 年）

(4)吉弘氏の躍進

1534 年大友氏と大内氏との間で**勢場ヶ原（せいばがばる）の戦い**（大分県速見郡大牟礼山）が起こります。この時大友方は、**吉弘氏直（うじなお）**（19 歳）を総大将に戦います。残念ながら氏直は、戦死しますが、このことはこの時既に吉弘氏が豊後北部防御の重要な役割を担っていたことを示しています。

1540 年代になると田原親述の子 **田原親宏（ちかひろ）**は、**国東半島から追放され**、豊後北部の実質的な支配権は吉弘氏へ移っていきました。

永禄年間（1558～1570 年）には、**吉弘鑑理（あきただ）**が登場します。鑑理は、豊前・筑前で合戦で次々と活躍し**大友家の三老**と呼ばれる家老職にまでなったのです。まさに大友家の重臣になりました。一方の追放となった田原親宏は、二階崩れの変（1550 年）の後、20 代大友義鑑の後継となった大友義鎮（宗麟）から許され、国東に帰国しましたが、大友本家の政治からは外されたのです。

2. 活躍した吉弘氏の戦国武将

◎吉弘鑑理（あきただ）（？～1571）

吉弘氏直（7 代）の子とされますが、前半生は不明です。**豊州三家老**の一人で、多くの激戦を勝ち抜き大友氏の衆議に参画したほか申次（もうしつぎ）を長く務め、外交手腕も発揮し大友氏の屋台骨を支えたのです。病死した時、大友宗麟はその死を悼む文書を吉弘鎮信・統幸はじめ他の重臣へ出しています。

◎吉弘鎮信（しげのぶ）（1544-1578）

吉弘鑑理の嫡男で 9 代目。若年の頃より大友氏の側近として活躍し、父鑑理と同じく申次の役に就きました。父鑑理の死後は、立花山城（福岡市）の城督を務め、博多商人・島井宗室との折衝にもあたりました。**六郷山信仰**が篤く天念寺の再興や**六郷山別当職**の重責も果たしています。耳川の戦い（1586 年）（宮崎県日向市）で 34 歳にて討死しました。

◎高橋紹運（じょううん）（1548-1586）

吉弘鑑理の次男で、後述の**吉弘統幸（むねゆき）**の叔父にあたります。若年の頃、都甲谷の**長安寺執行職**を務めるなど、**六郷山仏教にも興味を持った**といわれます。筑前の名族立花家を継いだ**立花道雪（どうせつ）**と力を合わせ筑前の統治に当たりました。2 万人ともいわれた島津軍が北上し攻めてきた時、**岩屋城（大宰府市）**にわずか 763 人で立て籠り、全滅するまで抗戦したことは有名です。この抗戦は島津軍を消耗させ、足止めに成功したのです。

◎立花宗茂（むねしげ）（1567-1634）

高橋紹運の嫡男で、宗茂は晩年の名前です。幼名は**統虎（むねとら）**といました。**吉弘統幸からみると従弟**になります。立花道雪の娘闇千代（ぎんちよ）と結婚し、立花山城（福岡市）の城主になりました。島津軍が紹雲の守る岩屋城を陥落させ（1586 年）次の立花山城に攻め寄せた時、若干の 20 歳であった宗茂は、この城を守り抜いたのです。それだけでなく島津軍の隙を見て岩屋城を取返し、秀吉の九州征伐（熊本ルート）を先導して島津軍を次々と撃退していったのです。その見事な戦いぶりを "**西国無双**" と秀吉に評され、**柳川城主に拔擢**されました。また、**関ヶ原の戦い（1600 年）**では、宗茂は西軍の別動隊として九州より戦場を目指しましたが、大津城で足止めをくらい、合戦に間に合わず**改易**となったので

した。その後、全国流浪のなかで本多忠勝の推挙で御書院番頭に召され、徳川秀忠（2代将軍）の御伽衆となり、**元和元年（1620年）柳川藩に復歸**しました。関ヶ原の戦いで一度改易されてから旧領に復歸できた大名は、宗茂唯一人でした。宗茂は柳川には殆ど戻らず徳川家光（3代将軍）の時まで御伽衆としてその役目を果たしました。

3. 田原親貫の乱と吉弘統幸

(1) 活躍する吉弘一族と追い詰められていく田原氏

宗麟に許された**田原親宏**は国東に戻りましたが、重要な判断や決済に参与する加判衆への復歸はなく、ただ国東の一領主的な扱いが続きました。更に大友方は、奈多鑑基（あきもと）の息子を武蔵田原氏の親資（ちかすけ）の養子とし親賢（ちかかた）と名乗らせ田原氏に介入を図ります。これは**親賢（田原紹忍（しょうにん））**が大友宗麟正室の兄にあたり、その権力が増すことで**田原親宏の勢力を切り崩す狙い**がありました。

(2) 耳川の合戦で大敗

田原親賢（田原紹忍）が総大将を務めた耳川の合戦では、大友方の調和が取れず、歴史的な大敗を喫しました。国東でも、**吉弘鎮信（統幸の父）**、古庄鎮光、田染鎮富、高田鎮孝、大力兵部ら**有力な家臣が討死**しました。天正6年（1578年）11月12日（合戦当日）を命日とする石造物（墓標）が国東半島に多く残っていますが、日向後家（ひゅうがごけ）という言葉が生まれるほどの大きな傷跡を残したのです。



吉弘鎮信の墓
（長安寺）

(3) 大友氏の権力が揺らぎ、田原氏反乱の噂が流れる

耳川の合戦後、**田原親宏**は、突如府内の持ち場を離れ国東に帰ります。親宏は、親賢（田原紹忍）に与えた領土の返還を宗麟に要求します。宗麟はこれを飲まざるを得ませんでした。宣教師たちも親宏が反乱を起こせば大友氏は滅ぶと噂するほどの状況でした。ところが**親宏が挙兵直前に謎の病死**をしたのです。親宏には男児が無く、この時既に遠縁にあたる豊前の長野氏（行橋）より**親貫（ちかつら）**を次女の婿養子に迎えていましたので、その親貫が田原氏の後継となったのです。

(4) 遂に田原氏の我慢の限界。田原親貫の乱へ

ところが宗麟は、親貫が大友家の血を引いていないことを理由にこの継承を認めなかったのです。自らの次男親家を親宏の後継者として国東に遣わしたのです。これには**親貫がすかさず反発し、安岐城を本拠に挙兵（1579年）**します。これに田北紹鉄も呼応し、船で府内への攻撃を図りますが暴風雨に晒され、しかも若林鎮興（しげおき）の反撃を受けてこの攻撃は失敗したのです。

親貫の本拠とした安岐城は陥落し、**親貫は、拠点を鞍懸（くらかけ）城に移します**。一方の大友方の親家軍は、雄渡牟礼（おどむれ）城（国東・小門山）へ入城したのです。

(5) 親貫が決戦の地に選んだ鞍懸城

鞍懸城は、佐野鞍懸城と奥畑鞍懸城があり、岩山を生かした天然の要害でした。親貫は、この鞍懸城で豊前長野氏をはじめ秋月氏や毛利氏らの援軍を待ち、攻勢に転じようとしていました。

これに対して大友方は、鞍懸城を攻めますがなかなか落ちず、10カ月持ち応えます。こうした中で田原親賢の国東武士への親貫支援の切崩しが功を奏し、更に大友方の古庄鎮方の被官・河野弾正忠の働きでようやく突破口が開き、鞍懸城は遂に焼き崩れ落城となったのです。田原親貫は、筑前に逃亡を図ります。しかし、途中の宇佐善光寺で時枝氏に討たれ、ここに**田原氏は滅亡**したのです。

4. 吉弘統幸の登場、人物像、そして石垣原へ

(1) 宗麟からの厚い信任の父子

祖父鑑理が病死した時(1571年)、宗麟からの言葉が残っています。“統幸の父鎮信の幼少からの奉公を褒め、かつ松市(統幸の幼名：当時8歳)を国衆(*)に准じる”とまであります。宗麟からの信頼と期待が如何に厚かったかが分かります。*国衆：地方において軍事動員を果たす重要家臣

(2) 吉弘統幸の登場(1563-1600)

①15歳で家督を継いだ統幸は、先ず屋山城を即座に改修し、田原氏(親貫)討伐に備えています。また、この統幸の改修、油断なき態度を大友義統は高く評価したのでした。ここには、名補佐役の存在がありました。

②優れた補佐役 諸田土佐守(もろたとさのかみ)の存在

耳川の合戦で統幸は父鎮信を亡くし、一方の諸田土佐守は息子を亡くしていました。このことから両者は一層の親近感をもったことでしょう。

諸田が統幸をよく支えたことが分かる統幸からの感謝状が残されています。

「諸田土佐守は、息子を耳川の合戦で失いながらも、統幸の下に参上し、幼く東も西も分からない統幸を支え、特に親貫方に妻子を出してまで計略するほどの代々忠義第一、毛頭替わり目のない態度には感謝する。」(「吉弘統幸知行ケ状」大友家文書録 原漢文)

「また屋山籠城(ろうじょう)の時には、諸田土佐守の親類たちが悉(ことごと)く同城し、兵糧を懈怠(けたい)なく相続させた。それにより何とも無難に本意を遂げられた。」(同上)

諸田氏は、安岐地区に残る吉弘氏に代々仕えてきた一族で、変わらぬ忠節を示したのでした。

(3) 九州の仏都「六郷満山」の文化に触れる

祖父、父と同様に統幸は、六郷満山の世界に入っていました。天正16年には、伊勢神宮にも参拝しています。

(4) 太郎天への特別な信仰

天正15年(1587)の祈願文によれば、「太郎天童は大日覚王の後身、悪魔降伏の不動明王の靈験」とした上で「源統幸忝(かたじけな)くも叡山座主の尊名を請(こ)い、当山権別当に補任せられ、一山の法務をなす。然ると雖も今代は、国司の命に随い、法体を改めて、運を天道に任せ、身を国家に投ず。」とあります。

当時、太郎天は屋山権現(六所神社)にあったとされ身近な存在でした。

(5) 数寄屋でもあった統幸 ～府内・博多で身に着けた審美眼～

吉弘氏は一般的に寛(かけひ)城・屋山城で生活していました。立花宗茂も出生が寛城となっていますが、加判衆であった祖父鑑理の頃から府内にも屋敷を構え、父鎮信の時は幼少より宗麟の傍に仕えております。このことから統幸は幼いころより茶器をはじめとした高い文化に接していたと考えられます。

5. 「石垣原の戦い」の実像を見る

一般的な軍記ものの話とその実像について考えてみます。

一般的な石垣原の戦いの話 (軍記物)

- ・大友義統が、文禄の役(1592～93年)で大友氏改易となり、山口・水戸などを転々とする。慶長4年(1599年)に許された後に、豊臣方について九州で挙兵を目指す。
- ・立花宗茂の下を離れ、東軍に付くため江戸で蟄居中の大友能乗(大友義統の嫡男)の下へ向かう



吉弘統幸

(吉弘氏関係者所蔵)



太郎天像

(長安寺所蔵)

た統幸は、山口県の港町・上関で義統と運命の再会をする。

- ・吉弘統幸は東軍有利を説くも義統の気持ちは変わらず、統幸は諦めて義統と同行。討死してでも義統の恩に報いることを決意。
- ・別府に上陸した大友軍（本陣：観海寺、統幸は立石古屋に）は、東軍の黒田・細川軍（実相寺山）と対峙。数日にわたり激戦を繰り広げるが、次第に追い詰められる大友軍。
- ・死を悟った統幸は、辞世の句を詠んで、最後の大一番に臨む。黒田家重臣の井上九郎右衛門との一騎打ちに敗れ、討ち死にする（小栗治右衛門のパターンも）。

☆敵味方問わず語られる統幸像☆

- ・「大友義統衆討死交名（討死した人のリスト）」によれば、吉弘嘉兵衛尉（統幸）が最初に書かれ
吉弘統幸が最も重要な武将として認識されていたと言えます。
- ・『黒田家譜』では、「吉弘統幸がごとき真の義士は古今たぐいなき事」と高く評価されています。

☆史実からの考証☆

軍記物が語るように **統幸は、東軍につくべきと考えていたのでしょうか？**

①改易後の統幸と義統との関係から

統幸が義統へ茶器の工面をしたことや幽閉されていた水戸へ行った記録が残され、また、義統が許され上洛する際、統幸は、義統に中間（遣い）を送っています。更に義統編纂の大友文書録の断簡には「関東供奉 吉弘嘉兵衛尉」と関東供奉の役目名が記されていることから義統は、統幸に連絡を密にしていたことが明らかです。つまり上関に東軍に付くべく説得を目的に統幸が行くという必要は無かったと考えられます。

②統幸と宗茂の関係から

大友氏改易後の関ヶ原の合戦の頃、統幸は柳川の立花宗茂の家臣となっていた。立花宗茂は、西軍の重要人物であったことから、統幸が宗茂と同一の選択をしたことは当然のことと考えられます。

③上関にて統幸と義統が出合った経緯

義統が周防灘の渡海に不安を覚えていた書状が残っており、上関（山口）から別府までの海上移動に信頼できる統幸の供奉が必要と考えていたからと考えられます。

以上の事実から、統幸は、元々西軍に付く考えをもっていて、義統を上関で迎えたという見方が、可能性としては高いと考えるべきでしょう。

ただ、これにより統幸の忠節が色あせるということではありません。

大友氏改易後、失意のどん底にあった幽閉中の主君義統を、遠く水戸にまで訪ねて茶器を贈る等励ましており、石垣原の戦いを含めその終生かわらない姿は何よりもその吉弘統幸という人物の偉大さを物語るものがあります。

統幸は、義に厚い武将として敵味方なく高く評価されていた武将であったことは確かです。（講話：松本卓也先生、文責：青井勝久）



参加者の皆様と

大友氏・田原氏・吉弘氏歴代当主

	西暦	大友家	田原家	吉弘家
鎌倉時代	1200	初代 能直	大友初代	
		2代 親秀	初代 泰広 能直の子	
		3代 頼泰	2代 基直	
		4代 親時	3代 直貞	田原家3代
		5代 貞親	4代 貞広	初代 正堅 直貞の子
	1300	6代 貞宗		2代 直輔
		7代 氏泰		3代 直意
南北朝		8代 氏時		4代 綱重
		9代 氏継		
		10代 親世	5代 氏能	5代 親利
室町時代	1400	11代 親著	6代 親直 (親貞)	
		12代 持直	7代 親幸	
		13代 親綱	8代 氏忠	
		14代 親隆		
		15代 親繁	9代 親宗	6代 親信
		16代 政親		
戦国時代	1500	17代 義右	10代 親述	7代 氏直
		18代 親治		
		19代 義長		8代 鑑理
		20代 義鑑		9代 鎮信
安桃土山		21代 義鎮 (宗麟)	11代 親宏	10代 統幸
		22代 義統	12代 親貫	

* 太字は、本報告の関係者を意味しています。